

重戦車が行く '11 春 3 日目：長門～奈古 45km

(奈古～田万川は雷雨中断)

< 逃げるが勝ち >

4 月 27 日(水)

西方海上より雷鳴、徐々に近づきつつあり。雨は本降りとなった。思わず、海岸で作業していた道路交通省の職員の方に尋ねた。「カミナリはだいじょうぶですか?」。「まだだいじょうぶですよ、遠いから」と応えながらも退散の準備をしている。間髪を与えず、黄色に白ラインのジープは去って行った。「マジかよ」と呟きながら、私もゲッタウェイに移った。

萩を過ぎ、こしが浜の鼻を回った 191 号線の海岸道路だ。長門大井まで 4km 程あり、雷を避けるものは皆無だった。大型トラックが、追抜きざま波の様な水しぶきを浴びせかける。

傘で避けるが、折れそうな水圧だ。「バカタレー! 速度を落とさんか!! 」とその都度叫ぶのだが、聞こえる訳がない。故意にやっているんじゃないかと思えてくる。中にはスピードを緩めてくれるドライバーもいるのに。

傘さし走行キロ 5 分は弩えらいことだが、「俺もまだこれだけ走れる、捨てたもんじゃない。」などと自画自賛している場合ではない。雷は背後に迫って来た。ピカとドンの間隔が矢鱈短い。「三十六計逃げるに如かず」だど。

「地震、雷、火事、親父」と言うが、この中で即死につながるのは雷だ。やられたら一卷の終わりである。

若い頃、京都の山奥のゴルフ場でプレーしている時、突然の雷雨に襲われたことがあった。「ゴロっと鳴ったら、クラブから何から放り出して逃げろ。」ときつく教わっていたので、私達は近くの避難所に駆け込んだ。ところが、3 組ほど後ろの方が被雷してしまったのだ。ピカーッと光った瞬間ドカンと地響きがして、小屋の床に這いつくばる程のでかさだった。しばらくして救急車の音。後にフロントで訊くと、黒こげで即死だったそうだ。

あの時のことが頭を過ぎるが、荷物を放り出す訳にはいかぬ。走っても走っても集落が近づかない。傘とカッパと荷物が、これほど鬱陶しく感じられたことはなかった。

ついに傘をたたみ、なりふり構わず全力疾走に入った。こんな重装備で、全力疾走なんてできる訳はないが、気持の上ではそうだった。レースでも、これほど真剣に走ったことはない。アドレナリンが噴出し、心臓が喉から飛び出そうだった。

やっとの思いで、長門大井駅近くのバス待合所に入り込み、安堵の荒息をつく。

石見交通のバス待合所はどこも頑丈に造られており、格好の退避所だ。ベンチが置かれており、ここで雷雨をやり過させてもらうことにした。もう、動けない。

靴下とアンダーシャツを替えると、ようやく生き心地が付き、カレーバーと一本満足を 1 本ずつ腹に収めた。雨風を防げて暖かく、ベンチに横になった途端寝入ってしまった。

ここまで、長門から 40km 足らずだ。途中、三隅～萩間に鎖峠という厳しい峠があった。萩往還 250km マラニックコースの 200km 付近だと思うが、選手達はどんな精神状態でこ

の峠を越えるのだろうか。私の様な、へなちょこジャーニーランナーには想像できない。誰が何と言おうと、走りたくない、走れない。

峠の名前が、またよろしくない。鎖にがんじがらめにされ、今日の運命は決まった様なものだ。昨日の消耗とこの峠越えのダメージで、萩に下りた時には、走る気なんてどこかへ失せた。「どこで止めよっかなー」としか考えていなかったのだ。

ふと何かの気配を感じる。思い瞼を開けると、パトカーが止まっていた。おまわりさんがこちらを見ている。ウッわ、不審者と思われ、職務質問でもされたら厄介だ。慌てて佇まいを直し会釈をすると、去っていった。危ない、あぶない。

時計は 12:00 だ。1 時間ほど眠ったらしい。雨は小降り、雷はいなくなった。止めるにはまだ早すぎるので、次の駅まで行き、食事処があったらそこで終了と決めた。

大井から 5km の奈古に道の駅があった。「阿武町」という名前だ。物品直売所、温泉、温水プール、レストラン、発祥交流館、ちびっこ広場等の施設がある。臨海の、景観に恵まれた駅だ。全国でいち早く道の駅実験をした、道の駅発祥地だそうだ。つまり、現在 900 余りある道の駅の中で、一番古いやつなのである。「なんでこんな所に？」というナゾは解けた。今日のフィニッシュ地としては申し分ない。外でカップを脱ぎ、靴下を絞って、レストラン「憩」におじゃました。

注文は、「地魚のづけ丼」だ。この旅のテーマである「日頃食べない魚を試す」を忠実に守る。どんな魚でも来たらんかい、との覚悟があった。「今日の魚は何ですか」と注文時に訊くのはタブーだ。

ところが、出てきたのは鰯(ハマチ)。ゲゲゲのゲだ。私は、鰯は、例えば、蒲江畑ノ浦や米水津で高度に養殖されたものなら 2、3 きれ口にするが、鰯はあつきましえん。元々、魚好きではないので、所謂「魚くさい」のはダメなのだ。

初めに訊いとけばいいのに、変な見栄を張るからこういうことになる。しかし、しぶしぶ口に入れると、「アラ！これは何？鰯とちゃうど」だった。タレのおかげだろう、魚臭さが消えている。この際、「このタレ、たれ(誰)が作ったん？」などとは言わない。代わりに、「生ビールください」と言った。ビールが進みます。お代わりは、言わずもがなだ。

そういえば、佐伯の「あつめし《温飯》=りゅうきゅう」は鰯が素材で、こんな味である。たまに、食べるものがあつたのだった。

ビールを飲むと、中断のことはどうでもよくなる。「また来るさ」となるのだ。旅路でのアクシデントは、引きずることなかれ。潔いに越したことはない。

食事を終えて奈古駅に行った。14:09 のがある。時刻は 13:30 で、40 分待ちだ。次の駅まで 4km はあり、頑張れば行けるかもしれないが、まだ雨も止んでおらず、気力はすでに引出しに収めたので、ここで待つことにした。

30 分ほど一両列車に揺られて着いたのは、田万川江崎という所だった。駅前には何にもない。旅館「小室屋」は地図では分かりづらかったので、電話をして女将さんに迎えに来て頂いた。15:00 にチェックインだ。

部屋はきれいな 10 畳の和室で、一人ぜいたく気分。風呂は六角形のジャグシー付きで、冷えた身体を癒してくれる。その間に洗濯もしていただき、至り尽くせりの宿だった。

夕食までの2時間、昼に大の字になって夕寝を摂った。ジャーニーランでは、これが一番の疲れ取りだ。頭と身体がスッキリしたところで、夕食となる。

この地も漁港が近く、料理は海のもの尽しだった。独りの部屋食だが、テーブル狭しと並べられた肴を見れば淋しくなんかない。どうっやって平らげようか、と悩むだけだ。

先ず刺身。魚好きではないくせに、いつでも最初に手を出してしまう。「苦手なものを先にやっつけよう」なのか、「卓の華は一番に味見しなければ」なのか。いやいや、私の場合はどちらでもない。「この刺身、食えるのか」という、チョー情けない動機からだ。

中皿に盛られた刺身は、「食える」ものだった。ねっとりサラッとしている。鰯でもない、カンパチでもない。女将さんに尋ねると「ヒラソ」と言う。「ヒラソ？ですか」と怪訝な顔を見ると、この地域ではヒラマサのことをヒラソと呼ぶ、と丁寧に教えてくれた。

ヒラマサは、まずまず「食べる」方の魚である。一皿をペロッと平らげ、厚かましくもおかわりをした。これは、日本海の方が美味しいのかも知れない。

サザエ、とこぶし、エビ等の魚介類を、ビール大瓶2本で着々と腹に収めていく。昨日の消耗、今日の雷の恐怖など忘却の彼方だ。俺の胃袋は頼りになるぜ。

そして、酒。幸運にも、ここ田万川にはすばらしい地酒があった。「東洋美人」澄川酒造だ。雨まだ止みやらぬ宵の口、旅路の宿で独りコップ酒。しんみりと、淡く清らかだった。

今日も、あたたかい宿と旨い料理と酒に 出逢えた。旅っていいなあ、人生ってすばらしいなあ。はて？どこかで聞いたようなセリフだが…。

<奈古駅>

